

治平金訓

三十六

三十一

漫録

第一

庫文閣内	
一函	三四五六九
八架	二冊
	號類
	和書

186

内閣文庫	
番號	和 34569
冊數	21 (21)
函號	190 119

10055

共廿一



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak





治平金訓卷三十六

臣六操行下

一 尾張清瀬小依長市渡の時近邊に甘態たる松公所
 或時松公近所の業屋へ市出近所を集り流ひ事波
 松公小く大小を除き目通りして一人旦りの松乃本
 也何夜有れり事速報へさせたるものこと傳ふる何事も
 何とも中傳はるる事後各所秀吉末座小あり〜の畏

りいとして軒前を三法源の町中へ籠る急成市用あり
兼く作付を多し町人足の数不残其茶一把で持て来連
向ふの松公口出魚と籠りて兼く法令まひり
まハ我もくと其茶一把で持て来るも一抱何十本
と定ぬ人足何百何十人と究め惣く小溜りも指を以て
目通りを六人の松を一筋定めて結く必下と自分
して心中へ入る片端結付て通り降りて其茶を指
来るもその残る数を以て何十何百何十と知る不迷

其時井りの内小埒明熱敷を中よる伝長とよ方を
大き小感りむひりとあり

又或時清源の本丸小埒板の井戸あり地形高く井の
外深うりさ夏月伝長近匠小作けりハ彼井戸水底
の水ハ定めておき冷り成魚と底乃水を汲取るもの
と戯るる作らる末庭小庭春廊ありとくろり畏り
とて由基而小云付大ひるる徳利小口を以てまは小
繩を付まゝ別の繩を徳利小付る井戸へ沈め徳利

の地小者より討口の繩を引て口をゆるめたり水はか
一盃入てくくハ條の水を以て引上げく徳利あり然に
是よりこゝ他略を大い小襖着者くと云り將さるるか
かゝ松の敷へ板水の丸板是等を以て見れハ如何板
乃率も自分方寸の内あり遠く古人の是流を端
むへさふ自己工夫成るべしといひり

一 山名豊國入道深高成と云古き羽織の形を敬して
城者あり

東照宮の御前小糸くまといふ夫ハいうふと作者は水
萬松院殿より賜りたりたる物にていと中をせり石
田をを忘しに本小背くぬ者うゑと御感有あり

一 森三九橋門可成ハ江州安國の淺井相倉と合戦
く討死を孺子勝藏長可後武藏守次男ハお榮と云
隠れあき弟少兼あり佐長市親志の市小住之ある討
由度の間の窓の扉をおらせと作付りとお榮あり
小く紀竹の枝を拵ぬ歌の流き上の上ハ子代のせいにて

及て予して見えぬ也。延上り彼竹ひてさるる見え小
大葉より小水を一盃入茶の杯の上小あけ茶をこり
ふまふものをこりて茶葉をこりて茶葉をこりて
茶をこりて茶葉をこりて茶葉をこりて茶葉をこりて
こりて水もあつても不首尾あつても小葉を入るる味
浅くは是はお茶の作法をたたりし由傳せんとて信長
公の成程れたるまにかやみの神妙なる仁めて武勇の器
量もあつた小十六歳少くも百石の石領をとりしれと

分り

一 信長紀伊の雜賀孫一府同若丸橋つ見舟を流て除
らしめんと使をやる小使海より殺さるや留るる
やのるいよる分明るは信長より福く稲葉伊豫守
に命を稲葉原彼地小付く孫一府見舟信長小除く
尾張小味くくは信長孫一府小回て曰く初の使いん
孫一府曰は是を殺し信長曰何ら由小こ水を殺す小
孫一府曰主人誇歩多くいさむら小案月をも通せ

馬小余りありて城小城門を叩き佐長の使と稱して
云誇り色驕きり深く兵を捕へんとむる者ありと
思ふ丸と二丸のる小入付門を閉ち後より取込てそ
討果しひ佐長曰然らば何うある稲葉を殺さるや孫
一節り曰稲葉はと体さるめの使と大か吳あり先
み六里前より按内を慇懃心小佐長の使とて来
るは櫓の上より是を見せし馬鞍飾らば出立質素小
して歩士只十人斗りつして城門の外小て馬より下

あり人を殘し若黨五人弟後死一人具し威儀を正
しくして徐歩あり来るは大小是を感へし自身門を固
き出迎へる小拓入るは伏せし義理明かりてあり恭
敬之股川のそつとより思ひ布のト帑をくあり是
則身を儉小して材を武事小用る志るありし良士
の風あり小感して帰服せし佐長是を以て且等且款
しむる

一 大屋民衆少補忠直り母身いさし若くして夫小おくとて

よらん方おくりたるは品恒々子のものとも象角斗り
いづく松平周防守の家元是田竹右衛門元次お嫁せしめ
くわい男子をとりて是田日記といひ忠直お母を同く
多しこの方おり対お是田は教養の字名ありし
神君昔より老より石をくわいのるれはくれといひ是と
い波日記を石はくわい忠直の名字ありてと云と名
系くせよと此作中く忠直の母の方石はくわいといひ
誠小高き次女をくわい忠直がく石はくわいと奉だふ

忠直の父の名字のゆふおせしは忠直初時より君お
はくわいれと一詞おありされはまを志すはいふお母を
同くわいはれともを志すはくわいお忠直の父の名字
ありしはくわい人奉思ひも考らはと辨く中々れは中不理
お極せりさくわいとて

神君殿近く石はくわい一位の局お此作養ふく子と
せよと有くわい一位の局お子神尾形歌少補く方とな
くわい石出され後お神尾傳前お元勝といひくわい

あり

一 安長十四年己酉

権現様加後肥後を清正を底を別白市儻いとい肥後を
何公則 御志志し上めて肥後を頼たさうあれ
とも 市遠意あるその旨は作出肥後を祈り如何
板の市来小く市産ともありは作舟板小一令を不顧
さう上中へき是恪小市産い必を秀頼め悪後市
産かりいくとた中めさ市産あり小旅くハ私身小及ひ

中候ハ如左仕る安長中上ふ

権現様市小法成秀頼め市来我も同子大切小思
石丸板のり小を尾州清源の城市若法法成思
食せとも 市遠意し申るハ安長小市産い何も私
同来小て存ひとも一人小心成 作舟板小と申せハ
伊満足に思食を裁ありハいつきもハ市を法作へ
申ふもさ方よ似せるもの来小く明年成名古法
右の仕合取肥後を一廉肝煎を思の外首尾よく出来

ひたり

一 長曾我部盛親ハ大坂の城落しは落して其乃
中ふひそより隠れおろそ中内越右侍門飯紙
持りあるを城頭賀の士長清之弟右侍門飯紙
と云流の人ふく中内を熟知居しうハかくと告て遂
に二人とも生捕り伏見小糸より由玄園小糸井伊
直孝安後對馬守大井大炊政列府一軍の束下城
向ふ小盛親中より六日の曉必死の軍をへしと云

極めたるふ赤旗の横合小束りていを見く瘡をありし
軍々也(打まけていとい小拾子の内小

右徳院様の軒前小侍臣二人立くそくげり盛親
城守備者し小盛親も是をおろそありあやま方を
さし見く居ありうろそ中内ハ右君の御前小及
ふまで附後ひたりし忠節を感せしと城頭賀小賜ハ
り由ありされを蒙りけり其後盛親を築固し居あり
すし小飯をうつさくわりてまある盛親築固の士此

中おとふしやう小母あつ人を咄てむくしすり名おもか
らめ捕まへ来たか多あむしハ客をりりも能とおも
うりかし物々ふかさいやしき食物をすゆり礼義や
あるとさうし首を刎くことよれと云る時井侯
掃部政之を打てこれを思へ流もる此よりま
ともうあとお小怒り御厨小下知していさ死よく料
理を潤させ縄をととせ座敷小長者我歌を招き入
さいと怒小方せを休めぬといえさしころ小長者我歌

是こそ礼義を志り多り武將の道よと恨ひて始終かし
毛むらめさくしさいふりけるとけし

一 関白秀次守野の青巖寺わく自害ありあはし事を
有り冠せせさし人々前てあて流せさし自害し
ある中小小村常陸介師春檢使の松田勝右衛門小向ひ
今有関白襄樂をせし伏見小延くせむんと定め
られしとき師春中ぬるふハ大岡市對面だ小おそしや
さん小ハ流者のはとめしめむりんされとも夫追も中途

より遠國へ放流せしむるに及びしかば、身をもたぬ小
伏せりし必死二ツのるふも、あをれ大岡の使者を
斬て捨流の妻子、腰樂小首を人質、山取罪あたる
城に同せむ小首、さもあゝん小和賤も、堅く定り
又我も勇名を送し、空しく腰樂を出させむ
ふ板やあつと、と再三流り申すれとも、各大岡小敵
を、公の、とて、取川、いざり、さ、物、れ、の、関、白、小、於、て
異心、よ、う、海、さ、る、事、明、く、之、命、を、奪、つ、て、あ、ら、り

ふいそ恩苗象の中、小も忘る、つ、く、次、と、云、是、ら、を、松、田
折、を、ゆ、く、秀、右、小、中、く、ま、ハ、大、岡、本、村、の、志、を、懸、く、あ
妻、子、小、米、百、石、を、懸、く、系、於、誓、願、寺、の、辺、不、は、後、居
せ、と、と、

一 大坂、小、秀、頼、公、四、冬、贈、財、今、福、と、外、不、小、於、て、軍、功
の、諸、世、小、感、状、或、小、武、具、馬、具、令、銀、小、と、收、金、小、依、て、市、賣
美、を、中、さ、る、依、く、上、下、共、小、勇、を、な、し、小、村、長、門、も、重、成
城、石、を、冬、今、福、提、小、於、て、東、國、の、大、軍、と、挑、戦、ひ、く、多

勢を返るひけ粉骨をそくしんは日本を双の勇士とも
云ふ一其武勇を稱する者ありとて感懐正家の
服美を活賜り長門を漢て洋載して由前小指是中
者より四冬今福合戦の事柳も長門より武勇に非は
市願けの軍を并一子の序苦共の身命を捨て相戦
ふ所小勝利をゆりき討小大所修理後又去清と外
七組の番隊各粉骨をそくしんは小略所今福あり
とも小味方勝利を得ん何そ重成を人の言名小ありん

や又伊成状の事重成不守の限り小ありは只今下し
是よりお後とも小怒なりし市宝藏に願け存るまは
長門より小於て二君小はへ存るへき者小ありは元感状
を他の家にして彼所を以軍功を有りし眉目と
すし小孫小是を傳ふ重成に於ていと守りし由本
意を遂らる小ありし市服前小くの働るれハ甲乙人
の海より新ありは又市景報拙くして早くこをせ
むる重成真と黄泉の由先小をてはるはハ閻魔の廳

乃海山せんより外小差るるに世原宗領仕るふ不及と
之上を父者潔くを感歎せしむる事なりし時小重成
二十二歳秀頼公と同年あり

一 小治甲斐守 徳中成田殿より
六万石あり 其國の市村一万石あり源を在馬
とよみ其方あるの川原あり石田治部が埔と不和して急よ
市勘定の率を少治有るれい急ふ致すべく極かく腹
減切らんと思悟して日以加後肥後を清心と懇言せ
之志のくのみをいふ清心のいよく其の苦勞率えとて

令子と方あるを不慮合わぬ市勘定は上げり率減敷
年の後清心の息園東石吟をれい時甲斐守世とよ
六万石道中ぬき以違ひいさそくへ拓きはるに戸の死
少治仕る市系府小かり市身上破滅必定と相争ひに連も
死る命是より因之へ死る返り旗をよこしり(亦も返
國ぬれに加勢をいしとよ肥後を争う我も身ぬ死へ
あし急も角もに戸にわりて上言ふにせしむと中さる
甲斐守より戸へ死る返りて其も市月番の市死中へ

致誠私奉の加後法正小大恩を法正市松後肥後小
途申めて逢ひひ死かくのこくよ中ひゆとも肥後さ身よ
覚あし如何極とも上言小任をへしと中私奉法正
存ひゆも不忠の云り後山相守へり上乃思石も有らん
如何極も忍入市は直を待たると中上らるる此を充
申より申ふ之上有あまの急の入る奉るりき方小
市構ひたりしあし帰城はゆりし休息致しへとの
奉めて市構ひかく奉仕ぬと後上言小甲斐さる

を万ある恩をさへおくぬい家只今六万石をきりしき
命を継ゆへい何程うあくぬい以後忠を励むへい何をも
改奉小あつらふを付すとの上言を何をも取り有るる
にやあらとあり

一 秀右殿 齋花見の時小法大名来會せしもの持玄園の
上ふりり横目役の者刀持を玄園より中を小皆下り
多り若田利家乃派者戸田越後と付いし二十歳
をりりの小姓ありし久しく度せり死せしびとて味小

立水以急角さるるを何者ぞ不礼之なりは打擲せよ
と云戸田大八怒て士八本より字下あり服者より
社辱を文へ地理ありや身を利家此政を碎りとも此
所を三々〜〜おろさんとあるはげ刀の脇負ふ所り
とて柄を極目を怒り〜〜思切多々氣色之横目公下
是誠おろさんと三々〜〜利家何事そとて走り出され
り水ハ秀吉も刀を取て出む〜〜り利家戸田を見て叱る
之さ〜〜む秀吉彼ハ誰そと問ふハ返り小姓之と云ふハ

あつくと申されあり秀吉府小倉にて戸田社士之
用小三ハ者ありハ秘藏せしきよとて文小三礼の外ハ
あり

一 菅田能也与利政初名ハ孫ハ府とりハ右大納言利家の
次男ゆて甚忠子あり〜〜ハ百武石の内能也一團
拾三方石俵を遺云〜〜て配分せしる關ヶ京市陣小ハ
関东より石小集〜〜是小依〜〜市治世の後主領
地没収せしる此水とも足利長の戦功小免〜〜て助命

せしる治の漢賊小執后利長より乃五百石の合力を
以て樂原后を討つた利家より家寶令限とも大分
由つらと優福へと云く交長十九年大坂陣小秀頼を
奪て以て招くとも不系

大神若少の石考特のよりめて岡本にて兵出拾万石
て給合市月三念の不利政のいよく大坂の招き小不
意の岡本への市忠節小非以大野修理亮後を月給の
杯の支配成文をさるる系にあつた上世範城を小つち

戦功ありき一人も武功者の指揮あり何そ意にこれに
同せんや海招き小不系を由賞取めりて以て出との義
ありハ本地終堂一圓を残りハ賜るといふとも得た也
まらりす唯て出との後ありハ本知出らるる意を小於てハ
出へ拾万石計の端知りて岡本まで中り伏賞
ありすしと中切二番おも不中と大坂よりハ加賀
越前も圓て給す給構らるるす之夫小不意利政も一
意量らるる人あり

一 堀監物直政ハ越後守の家老たりし人越後守伏見
の邸にて日暮小暮を送り出さる小越後守怨むある者
ありしはかく是居る意小きり掛しそ越後守も板
あえせし小監物たる乃うしより一番に來て彼
者をさきり倒しけるそ右小供たる士とも若夫小打と
めあり後日小右の士とも監物小逢てそ日乃事さいひ
おと日暮といひ不意の事といひ我おともをあらびか
おくせしはいしを市身小いさるこの跡小市後ひつる小いとな

一 二ハ一番小右に市あひひ小や不審ある事よこそ存りし
といへいや各とて武色の某小おとるしをわてはかくりとも
某ハ兼くひとつの是悟有りての事小く各小ハ世かく
こある小某を先をさせらるるとおそ存りし世後各ハ
殿の市供を勤らる事小くハ一向後市公御小もあるく
いさし今近ハ人小中さぬ事小ハとも信文いありし
想して吾の市前小伺候し市後小供奉しハ時ハ紙小も
暇ハ目をやしハ初中終者小目をえんかさんとしてさるるを答

要の法といふは凡そ其の勅許計帳の事也此の
事はといふ事かゞ有りて不意の事ある時も我志は
小あふり速あるものにて小其れ一を必忘とす小
魚といふといひとあり

一 享長十九年大坂の事起りし時片相市正茨木城に
揃籠る大坂より寄来多し打渡をへてし風浪有り
を以肥後守藩府を市帳下され左所へゆるとて京路小
控て板倉伊賀守方へ三寄あはれ伊賀守中多し片相

市正茨木城小取籠るを大坂より攻へさし風浪はふ
より加勢れ事を申越と云へ肥後守進ていらく常の
系勤の帰りに少く人少小いれ均とも茨木へ加勢小系
いさか否伊州大い感念有り流石肥州守特多し中
分より市越小控て小茨木堅固たたく一版路へきよ
なり則茨木小守りて赤市正小志ありといひ市正大
小収小別城の若小大いあり是小宿陣して日又日還
留を大坂より寄来とさるもやう小控りなれは左所へ

帰るあり

一 花房助之清藏之秀右の公小伴ありて依竹の
汗小流さるる居あり小
東照宮御心を付くは花房の子を武州長景公本門
寺の上人小領け年一を後小村宗康政養ひて花房
さとり助之清充裏席上小も人小扶けりさほと
ありしに

東照宮の作めて大坂の軍小も従ひしり、宗相あり

攻口小向ひ軍ありし吾宗相を教小向てよそよ愛を慕
と思ひく出ありとせりる

東照宮御打旦りの時道のうら小宗相を並て中
宗相たるしを元川肥後さかくと中しは花房
大車の時とおもひ武を好むる宗相も志の裏へ
に誠小大丈夫ありと作りれあり

一 景勝は征伐市軍勢白川に攻入小及て依竹後より
取掛之を難説して小公の市軍中靜るすすとき

花房助之清氷戸を忠出小公へ来るを幸小依竹敵討
と忠(たり)切く出へき中と市守有ある小義宣抱く
津義ある人切て出へきもの小北兵と申上る能ハ義宣
賢く切て出へくさる旨汝哲之紙を書魚しとの上云
ありと付助を清父子のるしと云ハ能斗ハ切て出へ
うずとの哲河ハ沖免て出下れと申上るハ沖撤姫
悪妻花房退出跡小て助之清ハ因及ひる者有
の大將の思量ふとハ思ひも考ぬと上云有るを一

度の人と云ぬ顔色ありと後助之清病死小勝んて
先身小公市陣而して依竹ハ切て出へくハとの哲河紙
書るを以て名大將乃市見限りを得て一廿沈端
ぬ名大將小仕へる軍ハ片之隻浴も公を盡さん
有へくハ以上云小但せ哲河を書依竹出渡り有り大
何の誤りありあらん景勝源大の軍を分津小待り依竹
後よりかから市人救安きと云ぬもふくハ小我依竹より
来り義宣出魚しとすとの哲河を書たりと伊ハ花房

能く月記の實を知れハ折々詞を書かハ市陣中の雜從忽
靜まらんとの由思意を奉せしめて思ふ所御返答申上
末初ノ送贈是小之儀と申るるとそ

一 関ヶ原破逆と諸將和賸以留く大名

内府公卿方へ系る申小毛利輝元始終仕方悪くくハ
ゆた家光の内右川藏人を二之隨身威小依く毛利の
七ヶ圓ハ由元上げを由構軍人小成花人小三拾六万石
下小村小藏人申上ハ私由隨身申上ハ私身代能て仕

存号少く由隨身ハ申あけハ毛利家末代ノ為由隨身
申上ハ依く由座ハ却て主人ノ家を潰し私汁ノ業ハ
秘有不存存ハ村小嫡子秀元由隨身申上ハ私へてハ
下旨ハ作付ハ三拾六万石秀元小下ハ板与願上ハ夫と
叶る後ハ私も共小軍人ハ作付て下ハ由恩と存へ
とのみを願と申小付

内府公由感念有て之方々願ハ小似せいら板小もて誠
と方り三拾六万石ハ秀元小下藏人小ハ一旦由元三と

警をさしてより、流基より、小信子を入るる壺を死出、是
ふて、ちり小存、人とり小用、おもえぬおる水とも、是、成
流、死、並、ぬ、後、小、堀、遠、江、も、見、て、手、を、打、て、是、ハ、唐、物、乃
肩、衝、る、り、と、称、号、し、後、小、公、小、存、り、と、る、人、板、倉、勝、定
怒、る、り、小、
將軍家、小、市、六、と、り、り、を、中、さ、ん、柳、上、京
の、お、京、へ、來、し、れ、よ、と、い、ひ、越、さ、れ、り、ハ、深、谷、を、出、て、平、安
に、越、く、時、浪、人、を、と、も、お、ひ、り、り、名、護、を、小、親、族、り、り、て、之
お、り、る、隙、も、俱、お、ひ、り、る、浪、人、已、ま、り、刀、成、永、井、を、指、替、の、刀

に、死、替、て、け、落、し、ぬ、永、井、詮、方、お、く、京、小、為、て、後、死、罪
の、者、り、り、り、ら、お、試、人、と、て、お、を、付、け、さ、さ、り、ら、お、さ、ひ、て、令、色
も、思、へ、多、以、研、師、お、を、つ、け、て、お、刀、の、太、と、さ、お、る、て、お、り
是、へ、ひ、と、り、小、斬、罪、の、場、お、く、ぬ、ぢ、身、の、者、者、て、切、せ、さ、り、り、
お、り、の、永、井、お、さ、ひ、刀、お、く、切、た、り、り、小、物、上、隙、も、り、ら、お、さ、ひ、
似、多、り、紙、研、て、見、れ、い、さ、く、も、た、り、ら、お、り、て、銘、ハ、正、宗、と、切
たり、本、阿、弥、小、見、を、し、ハ、正、宗、の、中、お、も、討、小、亮、上、の、お、と、
い、り、り、是、も、
將軍家、小、存、り、て、永、井、正、宗、と、号、せ

うれとあり

一 是野丸月いもと蒲生家の士人う上杉家おはなり富
有る人あて候を好く考をにくむ一月の間二三日も令
浪成心のかく積てま中小外くるあくさささうりくを
人そりありあたり武時足成りつものかく令銀を並て見居
ありに近きあさうの士ありそひをいあう方人の者
ともあさういりあてさいさうあ足成りといるや正家の刀
城提て走りり一日一夜土家お育てり然とありあ川ひて

返りたり是成り馬丸の中詔大判令一枚持ありと安
及ひあせりて汝ら志こそあさういり人あ足成りあ
負してして義理のあさういりもあをりりあて叶ひ
うりうり公然たりと云て黄令百あせり景勝會
津小を記を付永樂浪を百貫文を執り相軍の親
しくあさういりあさういり黄令をち送りあり軍の支
成に人あひりあさういりも是成り徳樂小弁をとれ
とてさういり人あ浴りて日ひあ武備あおこたうい徳樂とも

世の田たうある時ハ諸方小まぬ^ぬうれて帳あり今人のあ
えてさはいてうの者どもいとまあれハ既小ま福きたるよ
軍小勝む者生るうらんとおもひしれハ今世の樂
〜〜と思ひくあ〜〜と云ふ

一 是時九月宗勝弟ハ元智の良源人を改宗するに石
〜〜と云ふ
海仙臺ハ不引浦生秀行會津ハ六拾万石由て帰
任せられ〜時九月二十日石由て浦生家ハ歸來名譽

乃士あり無隠福人由て関ヶ原市陣起り此時も永樂殘
き万貫景勝へ上る市来ハ〜と云ふ
此〜として差上る三拾あみ拾あ百あ百あ法傍軍小見次小
海す常〜月二三番〜大判小判と歩を書院一面に發
並〜と申小枕〜して合眼を海懸とる世の人おも〜見
若〜と云ふ入〜かと嘲笑ふりる時近而小喧嘩出来あ方
若搭出来大率小及ん九月と抄〜例の令を書院小
發見〜りをひ居ると〜と近而小喧嘩有〜と云ふ

しく秘苑の正宗乃刀指彼不^レ返つけ一日二夜小扱ひ
を奉小まら^レ之間ハ彼不^レ昼夜あり^レ小岩小扱ひ
たる令の奉か^レも不^レ出捨並あり^レ之^レ初九内々
志を世の人不^レ感とり^レふか^レ馬不^レの仲る何^レて
々持あり^レ人黄令を^レ枚刃持ひ九内^レ中てお^レおの^レこ
奇将者なり^レ上中下とも小令子不^レ持スリキリ^レ武を^レ
不成^レ也^レ也^レ石^レ竹^レ能^レこそ^レ合^レを持^レと^レく^レ獲^レ者^レ小^レ黄^レ令^レ拾
両と^レせ^レる^レ在^レ九^レ内^レ後^レハ^レ忌^レ狀^レ後^レと^レり^レ小^レ浦^レ生^レ下^レ狀^レ忠^レ々

よて小奉公^レと^レく^レ病^レ死^レさ^レる^レと^レ源^レ終^レに^レ常^レく^レ由^レ落^レして^レ菅^レ田
ゆ^レと^レて^レ令^レ子^レ二^レ万^レ有^レ正^レ宗^レの^レ右^レ刀^レ一^レ腰^レ送^レ物^レに^レ下^レ野^レ子^レ殿^レ
先^レ上^レる^レ舍^レ身^レ中^レ書^レ度^レハ^レ二^レ子^レあ^レと^レ景^レ光^レの^レ刀^レ貞^レ宗^レの^レ服^レ美^レ
城^レ上^レる^レ之^レ外^レみ^レあ^レ拾^レあ^レみ^レ拾^レあ^レ百^レ有^レ諸^レ傍^レ業^レと^レ送^レ物^レ小^レま^レ
日^レ來^レ借^レ並^レ借^レ狀^レ校^レ箱^レと^レり^レあ^レる^レを^レ火^レ中^レと^レて^レお^レ心^レ念^レか^レ
く^レ死^レを^レあり^レ

一 郡主馬良利の秀岩の長あり石田権威を次公小せんと
そ^レり^レ人^レを^レあ^レつ^レらん^レお^レ小^レ公^レ用^レに^レ令^レ銀^レを^レお^レ公^レ奉^レあ^レれ^レハ

必まを又けて密に私小供の形もかゝる事ありし
何れをいふか、小禍にあいんと思ひたすより石田小謝
してま令ハ大坂の庫に收め置ありまより病と稱し
多分出しせし後小旗を初たりしハ大坂居城の日
冬に發小歸りて床の上小旗を置て冬の冬後堂に席
天子存におし入し耐速水時之と稱を合せ夜討を
を筑屋小妨けられぬ位平井の陣而小忠ハを入せ大
城へけく不意小一軍せんといひし孫も用ひしに運

そめりと思ひし口惜とて送者に於小昭指し黒田長政
我小贈られし耐用ある事有く功を立んといひし
河あるをなかりよく長政小いひて返ししと送之し
そ子兵藏と共に自害に行年七十一歳と名秀右
乃時より黄母衣ゆきを水たり

一 依久間久右衛門安次源六郎実政ハ禁田勝家の長
あり禁田亡て後其弟紀州に遁れ粉川法師三池城
かぐらひ河内霧坂小城を據へ後又南に河内天野の國

見取要害ありて居る軍あり遂に秀吉小攻落さ
ふ後よ小田原に入心糸亡て兄弟合攻の称名寺あり
やく秀吉侍り少師父勝家のむ小吾を仇と見る志誠よ
大丈丈とりみへ今日日本平拍くぬれ心改めよとく
安次小吉方み石実攻小吉方石原へく蒲生氏郷に
附くる兄弟氏々小一礼くる時潰さるるを人皆笑く
かハ氏々物の思慮なく汝ありを公卿りを彼小競する
幸よ兄弟とも互に障りの士小あさるる物をととせたり

一 東照宮志願野^表めて功名せし景勝の士大將小柳盛成
城賜りりし小安田上総女ハ横濱を入りて城を打
破りし功大ありといとも直江と不和ありし友小功
上小をせし小柳盛成賜ふさうしハ後人小向て世後
小柳盛成を評文くのみして目出なる以上総一人ハ中なる人
ふくくさハクリの武功むありくありてはさしれともおと
りし幸ハいさハ是夜のみ武功ハ中達する述もあり且
殿の小命を捨く軍はハ露ちりてありも公方の

お小する来小川に尺也一は是より後も傲をこそ大子小お
まひゆへ公方の市感状何条向目に存へさやと活り
とせ

一 毛利元就豊前門司の城のかこみを解く川返され
時大友宗麟の士大將就田氏宗只一騎波うち際小池
来る小早川隆景乃士浦之宗勝宗をさへ度
陸小ありり就田を討とりて帰る遠く是を見る人
准ありんとりふよえ就只一人陸小ありりたるハ必を宗勝

魚といえ水く小果して遠ざりあり井上伯智と浦
之宗と二人勇名世小言く二人たちを水ある物の具を
若く又定りたる得道具もあく就田を討つ時人の
陰謀ありて返せるとせ

一 小糸丹後一人四方の白練に黒き蟻を繪よ書て指お小
志るるを謙佐見く汝りさくおあまり小小さハいのある
子細そと同いさ小丹後徹小味方よりハ思へくくし
さハあれとも進む小先存く退く小いつも後敵せん

他人の大名の指柄も拙小はせと教の世を初ハ因
かゝんとあるありと申せハ謙信ことりといふれ
いと持

一 姉川の戦小坂井右近の子久藏十六歳にて討死を久藏
と十二の討佐長初めと京に入つて近江小郡にて港
を合せしる別の者之三井角右衛門生濃平右衛門三
とも久藏の首級得ありといふ二人後関白秀次小はへ
久れハ世末沙汰ありて三井といふりありといふ事

新金小押込め直て罪小初と人と三井命を惜む小非
凡人の功名を盗たる悪名の子孫乃耻とある人奉は
おつたれハ今一夜詮義とくたまりしハ泥掬ハ浅見
後右衛門小問りれハ実否正とくといふと松ハあり浅見
成安古咄れたり浅見ハ世継と久とさ友あり三井とハ
日以中よりハ不通るれハ疑もあく三井ハ俗り小定る
色と三井惑乱とく浅見を泥人小志たりと非り矣
ふ人多りてとて聚樂の廣間小存列座して雀部

淡路守をもち尋問す淺見ぬり生濃八年以の知者あり
三井とい不通ふては是非世の人北洋せん事も迷惑あり
他人に作付くもよと孫んごろうと辨し中比よろうぬ三井
ら虚妄をいふ小たろよろうぬは以るれ大泥人ふ引多ると
とく中せと勅らる事とも判辨し中比秀次少て定て辨
す魚うゝはとりぬれはそ付淺見の今ハ包む事をぬん
武義の論少も詐偽ぬす一坂井の首を三井の死り多
に紛れぬく又さるる事とも比類かくれ生濃ハ何と存

阿やまう多うふやといひたれハ一府驚きて免角い人かく
是小りりて三井を赦す賞せしる淺見ハ後京控言次小
はへく大津の城めて武名をいへるるり

一江戸の石壁城ま川りる時淺野長晟作を形りて龜田
大隅言總を存めとハ石壁成て後為る事三度小及
るり

台徳院様打旦り御覽して何とて為れやと作有り
し小龜田漢くさるふハ大隅軍の時總の存角の進を

提げ先拭の陣終小為も来ハあくり石のを公の由て
せんくくあくりと中びり終く麻毛あちの馬を大隅小
賜ひたり小士の二毛乃馬又紫ことやひふけある来も
あくりは惜くんとり小を去井利勝中よりせりく別
乃馬を換く紫へよと作れり龜田大剋の者あて
十文字の陰卜板忠親造りあてさやハ端の船角小造り
栗毛小ぬり総螺洞の柄たり

一 大濤玄蕃長行ハ福壽家の士大將あり大濤ハ妻罪系

是ハ附大濤ハ後鞠の城に有秋田中総も同く鞠よ
所りく大濤を廣指小やりて己一人あき鞠を守り付
死して名を揚はやと思ひらん大濤よ向ひ江戸より城を
法死へき使進ま内小若陣有へくく廣指小こもは城
あへらんといふ大濤因く敵乃ト知あて城をぬん来
思ひもあふはと云ふ秋田城申を早防戦の支急あて
く小大濤ハ柱小りりて眠る外あ一人く大濤をそりり
あふ小大濤あきあひ秋田ハかく申くく防戦の用意

さるありし一思ひ定めたる事有て善事おこ
としハ子細城同大津城をとり日本國を教小
なり一萬ふ一も勝をわあ〜人々を徒小殺さん
り〜我一人大士の門外へせ〜城代大津を蕃と申
者ありとて腹切ん後城を清名と城の人々強うん
なきけうもよと云て各々の命小るる〜何の用
意乃有魚子といひたりか〜事小正則の泥書来りて
事あり〜城を渡せ〜大津と村上と右衛門三端と

右衛門と目〜〜紀伊の家小仕〜あり

- 一 紀州にて安後希の大津村上真端に逢て武功張
問たり〜ふ三端ハ十匹のときより軍を〜數度の
功名を語り村上ハ竹子の軍より壬生川の先近
等をいひ〜大津ハ我小村ハ許小小祿〜者〜士
大將にあり又福治の家にて士を下知〜ハハの
みふか〜もいひ〜ハハ希の大士感〜者〜あり
一 長年中禁裏小散樂の者〜時貴様祥糸〜あり

古是建法といふ深抱念劍術の妙も少く育りし礼の
率りしを雜毛替めたるは建法外小出羽織の下小
服先をうきしもの如く入先の雜毛をたし一打小切く
夫より紙横小かけ思ふ不よりあくよてふきしを負
敷を志し板倉伊賀守勝重日の御門小育りし眉尖
刃の鞘をえげし向ひしを右田忠を傍何糸をあらさ
せむらるやあるをそかけしを勝守長刀にてとく何
多へられし右田古是小向ひ要逆を礼のおの古首を

のよと交りしは古是ハ世宗宸殿乃階小息つ死居し
ら者小其刀打せん者汝あてはといひて階を下りて
之向ふ右田小眉尖刃ハを是こといふす小刀をぬく
古是交りかきりさま小倒れあり右田大者け倒れ
多るを切ち士の社こきて勝負せよといふ古是立ある
所を死くし一ち刀小切殺しより勝重恨ひて右田小祿
城増し益をりしとて後古是倒れしを切さるハ勇
あより有るといふとも氣小驕の矢夫ある小似あり古是

高買、銭、さ身、るれとも、剣、柄、ハ、い、ら、あ、る、ん、も、及、ひ、く、
倒、れ、ハ、天、の、然、ハ、こ、地、を、を、切、さ、る、ハ、虚、を、打、の、理、ハ、く、じ
とも、り、ハ、へ、さ、い、や、と、云、れ、ハ、小、を、田、作、滅、小、辱、く、ハ、亦、又
一、ツ、あ、る、ん、の、ハ、多、く、故、乃、倒、れ、ハ、を、た、す、ハ、も、之、以、打、ん、と
よ、る、ん、小、身、を、忘、也、脚、を、切、也、倒、れ、た、る、者、の、勝、ハ、成、
ハ、例、也、ハ、小、虚、実、の、二、ツ、有、各、是、ハ、倒、也、ハ、ハ、虚、也、ハ、各、是
た、と、ハ、実、ハ、倒、れ、ハ、とも、た、や、と、く、斬、も、男、ハ、何、以、例
也、了、時、ハ、身、を、防、く、来、虚、ハ、似、て、ハ、とも、通、付、あ、る、ん

切、ん、と、成、る、ハ、実、也、て、ハ、虚、ハ、も、実、ハ、も、倒、也、ハ、も、の、之、あ、る
ら、ぬ、と、り、ハ、来、ハ、た、く、ハ、く、ハ、と、立、あ、る、時、ハ、形、を、防、也、故、を
ま、り、を、さ、り、ん、と、成、る、心、虚、ハ、成、ハ、そ、こ、を、打、て、あ、る、と、く
切、と、め、ハ、ひ、き、滅、ハ、く、く、る、小、子、業、匹、夫、の、来、ハ、て、故、乃
あ、る、ハ、め、以、理、也、て、も、ハ、亦、ハ、と、も、陣、を、さ、ら、ち、軍、を
分、道、ハ、も、相、か、あ、ハ、い、ハ、り、も、や、と、憚、を、省、と、へ、ハ、中、を、お、く
ハ、と、い、ハ、ハ、勝、重、ハ、小、感、せ、ら、る、

一 長坂、持、丸、流、門、ハ、内、後、浦、後、者、家、臣、之、一、也、武、具、の、外、ハ

道具を嗜むるが火事驚く成て人々七藏を造り
あり我(道)武具を拵れとて七藏ありて常々中
ふハ士の道具を貯るはよろしく火事の時夫ハ川
邊ておくを死るもの之武具の外河の用う河ハ少
くも財力河ハ具是ハして並くへへ事ハ不
ぶく具是の拵底ハ成る平日静る時のとくあるは
是のこを心掛よと家訓を残されは事とて誠ハ一
に心を川ハ不ふく忠義の場ハ命を損さんとな

滑る能公掛とりふ色

一 細川忠利の士川ハ九美とりふ者あり川尻の代官を
勤めよとありて小出陣の時供小連ら水あは代官の職
つとむへといひあるれハをとして出陣の時供はとて定
めらる天幕ハやもをれハ一揆をなは初と西四の人のい
ある事あるれハを小出けて川尻ハ海邊船の老く知ぬく
細川家の米藏あり天幕ハ海上七里と伊豆川ハ兼て
地鉄炮の数を志くべむり地鉄炮といハ
備師の事天幕乃一揆起る

しつとく川尻の海岸小一間に一本の竹を立させ一本
おと小火繩をゆひ付け一本よき人の地鉄炮を配りり
後小天草ゆて生捕せしものいひあるはそ夜川尻の米を
死らんぬ小取をおしおして思ふ川尻にいづくとも
かく鉄炮を備へく思えざるあきては然本より軍を
乃ち名川尻に来りりとして取を度しとる之川おあり
せハ川尻乃米を取れ天草の城たるもく破せりり
く小川おる諒ゆく天草の糧ありそあり

一 尾張國守心とりし小道家清十郎同助十郎とりし
兄弟の勇士あり森は清十郎の代官道家兄弟の始末
誠然誠の如くに森ふつけく興力小せんとそ兄弟の者
相誘して佐長小はハ森かく位も卑しし人森小は
名は森守く名も從く中由ハ森小隨身せんとそ森の
興力とるす時佐長小は向て勸さくハ森と肥田
玄蕃元とは誠防く道家兄弟初陣小首とりし佐長公
少石さくハ双道家とりしハ字を自筆小指物小書あり

賜りり我小はへるは弟一とこそ書しきあれと宣ひあ
きとも一旦森小はへく又佐長小と云ハ二心之を双の字
小相無せんと申たりし森の江州坂本にて討死せ
しと此道家兄弟も同く討死しあり弟兄弟常小小
治り中り勇士ハ生るる楯小あんと思り人小後き
来ハあるありいと云らるとなり

一 三十三間堂小堂見之河極と云者あり堂の極のち人
ありそは世堂乃極ありたり射る者ハ世之河を以て通る

箭陀人小立る習之関白秀次公射藝を好まれ又遠
矢を羨ひ玉ひ射る三十三間堂へ成せむと云堂あそ
なきれつきとも一筋も通る矢あり通符の面々是をう
しへり小堀久を所世之河へ云そふり小水多ハ上様の
御矢一筋通し矢小見あり申せれありハ受小あうせて令
根多く申さるる事と有りし小之河云我ハ一代者のと
小の上様の由矢乃通り申さるるを見隠し申て令根を
何夜下さしと云とも天下小来かこれ有ありと云く

さしお家より暇も捨り上様の由矢も通り申候も
おてと申て流り候由て雲の所渡をさして椽を守
下らせしりとも遂小由矢通りしり

一 天正の比神保口所之侍忠祐といふ者あり何れの家小
仕へ多るを志し馬の主人おて多し師とあり居
あり世人の性急欲得さんおて多し毛小漏るも来ふ
し女武人他日嫁し多る来り居る小娘も傍おり
ける時屏風小左京の業平河内通ひの画り多る有

あるを指さして云性昔より沖津白浪の歌八人の急
おわして嫉妬ふま貞女といり自あつと多るを怨し
れ夫を深切お思ふるお対勝といひへし多るれ九士の
女るといひか有すし多し夫とて嫉妬をせよといひおち
さしりたるし多し夫も多るけたる振舞をするときさ武
家お急し家滅するもの之知し八人の妻とありてその
外八人の嫉妬ともいへ候くいさの拒みて外小妻を影へ
まいつと多し思ひと多しり多しといひへし世理を各

あ者ハ君親つづふるもの忠孝も知るまじりぬハ離別
ありとも社小ありぬこそといへり神保ハ後長州小高
身まくりぬ

一 河田八助指物十之清ハ小早川隆景の士ニ秀右小田
系正伐のときハ助ハ大指物十之清ハ八端乃母衣を掛
寄通る秀乃吞たるり小見く使者をひくそ姓名を問せ
らる余を収て宗付馬上より之將乃作小ハ各姓名を
申されよと云ニ士之りみて返答あり力及以馳返りて

かくと申せえ秀右叔ハ汝下馬かくて名宗れと云たる
あしん抑教書杯帯もるれ陣勝負小うる時うそ折
小ハ佛神の前ゆも下馬せぬ化流之さあしてハ何七人ハ
勝多り大指物をさし普通小起る母衣を掛多り士に
下馬ふきハを礼るり返答せぬこそ理りなりとて俗人を
以て下馬して問せらるれハ二士も又下馬して各姓名を云
て後朝鮮のとき世母衣指物ハ異國の者も服を穿馬
たりといへり

一 井戸龜右衛門ハ初小姓末後及小姓ハ十七歳しては此源三
を侍を討死シ大割の士多ク後細川忠興小姓ハ三子石
城清増田藏人と知喜多ク是増田ク父死小源人て源ク
たのミ並シ小源ハ増田ハ孫六子石家常小走ク一令
の贈もふき奉あり井戸夜凍むとともを父あ
父小走をクナリ増田一年に戸小引てゆり井戸ゆ流
を計りて上り素名あてりをたり歩者の健成を十令
りつと馬を索して通る増田見ク何故小今に戸ハ純

ありそと問々ハ花々々々奉を思をへ一云の
るも惜むそをハ早く小倉小いより問とよと云捨て
是ハ増田馬を引返シ井戸の跡小のり付日頃の知喜ハ
世射多クおそふ我ハ告りれよとて從僕ハ皆跡小さけ
只一人一里斗り志々ハ井戸を射馬より下り片射
毛先を急けとも世上ハ中へ大坂小龜を立ハ君も通日
由出取有へとの陣筋ありといハ増田大ハ怒る事かし
乃贈もふ死ハ貴殿の兼て知る所多ク何とて人並よ

出陣と云ふや討小江戸居りて此小倉小形付小も令限
不足あり唯なふも腹切人小志く〜といふ井戸常小
軍役をう〜との禱を定めて又又小大死せん何の益と
後者を扶持する貯ふ〜ハ只一騎教小向て討死せ〜せん
さてそれとも死〜て人小知る〜〜加〜小集人の貴殿と
同祿あり〜之狀教馳歩〜二百人不日に打之魚さ
用意之貴殿是小方うハ口惜る〜〜と〜といふ
増田せん不を志〜人惘然多〜事〜〜良方〜

井戸之秘傳小迫りたるを察〜先の之ハ備〜然とも
天下已小礼乃前あり時安も此とも危きを忘れざる
越武備とす葭日夜を作りて小備〜晴天小傘を張て
雨をす川凡物豫めせさ小ハ率小無せ〜此ぬ理〜明日も
も此憂有〜〜さ小あ〜此若甲の緒を〜ぬ陰の柄紙
撫ふ事あ〜ハ必也初おと初〜〜と〜と〜と〜と
此ハ井戸〜交近来〜〜深思厚情を感〜又〜之乃
切あるを以〜於小端者を拵〜儉を守り〜二年後果

高木坂の乱あり増田六子石の格をかゝり一陣を勤む
を井戸の功あり。

一 森守政右衛門忠勝池田の長長後左衛門秀勝の子こ
とくれ多あり者少く若流乃竹ノ鼻小居一以目困
の字亦何某を殺せしる字亦の子二人又の仇報りんと
せしに政右衛門或年江戸小沢時荒井小岩せし小
教道小清とゆて舞坂小沢道の夜二十間をりも満
く凡八百人斗り給け多し小政右衛門志つくと宗

通りし小教父小とりあはれは政右衛門流者六人して馬
城門返し仇の前小宗は是小清とるハ字亦小もやかく中
森守を仇めてしる人と唯今何とて打ひぬそやさしハ
系りありんと大者小いとちありふ人か一政右衛門あき
等ひふと討ひぬそやね後家さうとハぬもよりハ
えはと罵りて打さ江戸勢さたり字亦ハ流へく政右
衛門を討んと中々れいりくめてもあき討ひと許さしれ
しる又政右衛門小もさししり防さきし仇小くこれ

さるをもて勝ぬせよとのりも此ハ常ハ鉄炮入挺に
火繩小火をつけろや挺小箭をつらひやわと川したる
陰入本士二十人打連り秀右の時出仕しるふもかく
の如し刀をも敵中へ携へよと洋さる伏見の城を築ま
し後諸大名出仕者し小政右衛門ふらふ出仕をへし
仇の必疑ふべきといひしりとも政右衛門くもしりも此ハ
とて出仕を秀右の居間の次道刀をいれも携へられとも
そ日ハ後者小持せよとく廣間小仇乃ありりり中を打通

りり来ぬあく退出しりり後長長に奉り月小之河小
多病死したりりり

一 羽柴ト徳ヲ勝雅の許小二藏ニ藏とておし有りいつきの
城小ての奉ぬや有しト徳ヲ城しり出く勸さし死たる
を教付来り二藏ニ門を固めく揚箕戸を下しり教
張たて返り勝雅ト知し門を明て教二人を出して
討死し以道後石見加勢たりしり子細を問ふた
ぬめしりり死地小入り教あり是を討ハ城を破る

死傷をへし打とめたれいとて軍の勝敗小あつたれと
答ふ石見守武功の女ありしは大小感しあり

一 古田助左衛門ハ古田之助少輔重勝小仕へて祿石をうく
景勝を征伐の時重勝伊勢の松坂城小助左衛門を並に
たり三威を起せし時大坂の重勝の屋敷をとりかこみ
松坂の城を潰さしハ重勝乃ハの方を殺害せしといひ
送りしに助左衛門城ハ敵の作あつて人小潰さん来
存もよひ善さありハハの方害小あひ出り人を潰小

いさしき来られともいふせん妻子の死むるの悲
しきとて城を教小潰せしと敵を人潰りしハ運
そたしハ死を潔くせらるる若ら身の間ひこん
ハ大坂の屋敷をとりしハ成し敵やうて城小潰さしハ
敵小軍して討死し真途めて對面せんと大坂の屋敷
に云送りあり

一 福清正則配流のと正則の邸表の門前小浦せし時
忠卿震門ハ寄居ハ京元打白ひ皆士卒相具しあり

より芝の邸へ最上源入所義後打向り蒲生の士
とも正則公命を承りたりと申すといそ邸を出りて
さいひ入希れ正則作も及びてく佐州小部くぬき
おていとき徳次守右衛門守久上月新八あ士を以奥州の
風俗常にかきつゝ蒲生多居の者とも門内へおみ入小
於くハ各士ともを礼を替めく奉の破きも有へきあり
汝あ人門内小背て理をそひぬしそれともお入ひハ
来りて告知せよ自害をといをれし小背右衛門

是ハ畏り教す作をも承りたりといひも果ぬ正則
我今日 公儀小背さうく成果し左おのきさへわか
とるやと大小怒りぬし小背右衛門怒るくハ新八小向ひて
只今作のことく出羽奥州の風俗乃がさるるハ勿論之
立向ひいふ理を云たりともお入へくハ之を討け之
りおハ逃さく水逃入るると同く奉ぬく末の世までも
社辱たろくささくおみ入る奴京院のわれつゝえんと
さうあひくそれを改進かす後殿いふおもあふ

せうしんやとそつらふ新八もえり同心おいと書へしお
正則收て打うお川き二人かりしを云極之哉きあも
穂小理をそしし取川せん志のやくおせよといふれ
ういあ人畏りむり外とて疾を立ち門内お出むる
に奉るありししお正則信州小純とらんと書

一 秀右小圓小純とらしし付丹羽長重の小松乃城小三考
たふ小長重の士成田助九郎とりし者秀右先激を
小陸道の管領おせんと志津ヶ嶽おて約束ありつる

加賀二郡越前若狭を賜りな先激とせおひく後小松
十二万小減し既小減お進しとも中しし秀右の不義賭
む小解り有長小討し作付らむよたやまし刺殺に
といひおれとも長重ゆ入らしてて止み多るを秀右の
おして減せむらん大お怒り成田を憎むる甚しし
あれお成田小松を退る伊勢の相態小隠水居多り
しを終小搜し出しと教さむり成田子守た清ら
長重ははしし小松の軍に戦功あり

一 大坂の商小左近丞とて年久く薩摩の米を扱ふたふ
ある者あり関ヶ原破さる後義弘大坂より去りしふそ
人先をてこの商家小右のハ彼商待てびるの体ゆて
君いふ小おりのまゝと問ふいとよ討死ありしよと昔ハ
々此ハ商家派を流し年以厚恩を蒙りし米を此ハ
関ヶ原破さるゝとやとり必交小治りせうせんと相計りて
恥を没けし侍居るらむいもかく惜ま奉らせめく
由供小系んとて水中小死入んとせしと押留め今乃

時多此ハ人心のそりり疑くかくいひゆく突ハ一方
打破て交小おのせしこといハかく疑ひしハ眼もども
それき云ん小ハ時移るゝとく恥小承せしうせん
振をこそといひも終らぬ小義弘来りしうハ酒樽を
積むる小かくしよのせし身も付添て並よ薩摩小親
しと抄く

一 赤田利長の辰心田勘六郎ハ十ハ歳少て父の仇を討
るる人ハ或日利長帑藏の戸を開くとて心田小健

城あつけられし由(意)き来しと叫れし小おそり
あはれハ念て持し杖のく突きし小思ハさる小頼小中
りて血流る跪く平伏せし小服衣の鞘走りあはれハ
むくひもさるやとてあはれけりて杖ぬて打んとせしれ
城かこもり小田を門のけあり小田ぬすり病と稱せ
引こもり居しし小園ヶ原の乱起りて利長大聖寺
の城を攻るとさ一版をさし小上りて武者あはれを見おせ
らる小田ぬ六十人計り引具しあはれを宛物と出立てあ

通り城おつくと先かけし一番小宗込陰ぬく乳の下を
突通され痛むる水ハ謀のト小落る兼て泣者小いひ
ふくぬしハ息後さる内小利長の若に昇来る
利長見し後悔せしと来甚しきとあやまらる
怒小おとさりて涙を流さる小田やうて死り行
年廿歳世小おとさる弟男あはれ大別ハの働
家討死しりしと若日親しき朋友小壽ナ南ラ香を分ち
物りしをさし大聖寺さやうといひてあはれ

たりといへり

一 園ヶ京の礼乃時加後赤明の山の方大坂小左くさの
河村権七郎を伊豫の松前より大坂にやりし小忠
ひき屋敷小左さの山の方小相見の松前より長尾ホウカ
たりとて系りひ若奪ひ取んとせんとも長うてあ
ん夜ハ危くお思しく石水ひひそとて屋敷乃隅小井樓茂
のけ柵の赤ゆひ敷小むくくるややかるをぬ時ハ自害
城をぬけも所供中魚うと云いる小細川忠貞乃小

の方自害此後人質を奪ひ元来止まりり河村小
武石の祿を増つつつとととと後河村いひ赤乃大坂川は
乃守り固く申しく通とる魚うを祿ろを尼ヶ崎の徳史を
かかひひ赤あ細この中ち小こ身を云いてぬ敷の中又入いり
しハ必死を思しひ定め多たり之園ヶ京の軍小首赤あ者
に同おくくはは赤あ恩賞の落おり明あるぬ敷ことて
出奔しくくはは赤あ明愈あて探出して流せむと云いししハ
ある山中かくと居いり大坂乃礼起しり時赤明に答

残しとめられ不意の来ありし丸巻より攻殺さんとい
ひあがりそは夜更に河村赤明の屋敷の門を多き青
木坊右衛門を呼び出さるるや……之れを思ふ河村
ありしこはそもいつある来をといふ河村来ありし
さやうなれとも君小治める者の忠を彼をい常の習ひ
ありゆゑ小過あり大坂乃来に不こして殿を嘲りし
出奔しるるも後悔今又益なり十竹兼平は仲よつと
此居し小志ありの来小く殿も危くおろし主人心

圓く夜を日小継て糸あり多うといひは赤木誠小義理の
志いさる来なれとも殿のいりり甚しきれはかくと中
多うともゆきれしと帰らむとといひ河村居る
者の城を知りしふ河村あると来さるやといふ
に門内小たふ入をいり帰せといは惜の河よ松上ハ町
屋よかくも居て殿乃先途を見人と云しは赤木さ
ハ先中て見んとて内小入赤明又告せはそれ呼入せよと
く中して窓前小石出さしりし一月見より涙を流さ

此の小河村も涙むせむ吾臣を〜洞もあ〜
河村おもひよ〜辰殿の沖前小出らるよ今生の思出に
此と申す嘉明汝う志いせんやうもあ〜と恨むらり
明く河村こそ来れとて中絶きていひを命〜大軍乃
援者りやく勇〜り嘉明氣絶〜て八子石崇られ
りりねる〜病死〜れハ奥州四十万石ふあ〜
と此河村あり〜人た〜んハ國政の補依た〜ん中とまげ
う〜と〜と〜

一 湯宿越前を野本右近といつるもの打死〜り上り
某ハ越前率古傍業の好身流〜り多小依て湯宿
を身を束縛〜首をの〜打せ〜と有体小こそり上〜
かハ

神君村小由賞者あり〜と申す大坂夏市陣乃とて
真田大將ハ依幸村の首級をハ越前の西尾久徳打死
あり十文字の旗を掲〜突あり小幸村落馬を久徳
組人とせ〜ハ幸村起上り魔を正〜く構〜今かく

由是小首を授る事定りたる因縁ありたのみなる事
有也兜ハ甥の大月記小のそバ河内さ小おくりりり
相又此麾ハ敬下りりの相傳小く秀頼公りりの賜りのこ
首小流く言右に傳へられよと威儀をたゞくくく
打せあり扱首突検の時西尾りりり幸村と陰を
合せ組打いりり打死てハ所云上と

神君関ハ石市板子をせらとてハて方右と
斗りの上云小て幸村り首死ハ天晴の事感賞小も

有るつとあるととて人々不審小おひひ多りりり跡小
り又上云有るハ西尾ハ傳りりりりて我を欺んとて
りや幸村何とて罪と逃をあえせりりり良相運りり
後正史小首を授るりりりの流りり西尾正直小りりり
小ハ正功小石をハ巻きハきりりりりりりりりりりりりり
せりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
知者りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

一 猪乃越中相浴小先何者出てもありりりりりりりりりりりりり

名したるより又よ記者討に討死留れも中々初
めつ終者て討と思ひの自給を以て奉育し
又語り申は人並ふと思ひ跡あるもの人
勝ると思ひのやうに人並あるもの陣を
さうさぬけつ々りつ先人を越え先を
お別してさ
ゆんと思ひの中を成は申おくり申

一 福清正則領地石とられし村林影右衛門といふ者
正則の息女乃侍正則の前より出く困む者礼入

早く由自害致すくは是正則の奥方の奉
由を煩さるへくは由公措はり敵腹を切く由教
火をうけ流すくは人の清られさるやうに
後京師の侍小幽居を右の姓を言して言
以て招く大石河村に世に我年七旬小
今ハ世小守みふし討小石出されんとの奉
相果ハ討の一奉小由くして義を守らる
後乃奉小あはたとい板群の功小かせよ充

是進退不自由の身して一本槍の者明日何事あり
とても若武者とも小遣に劣りては死小言知をむさ
びりて石小遣り家公を救くしてはとく終小仕へ末の
と友孺くを小和いおれとも一っ小息のおをも
顧みらゆよと云林我子供の心を思ふ未人小是
身小恋せぬ言知を死るは社を拓くの本なり人乃
禍是より生するあり位牌知りて死せく分小
るてくおと人の口よの事ん小子を忠を死るの道と

りふへくはと上流浪人ゆへ子供小知ぬ各主君あ
り立身のおよ帳を清せんも大なる貪欲あり人皆
命おあり禍福ハ人意を以て如何とも生へくはと
云て従ひ

一 守江廣高の家は池田市麻久津といふ者有り後
の戦功を室祢首供養し有り彼の武士ありし
浪人ぬく困窮に及びしる事小廣高招きて茶の
代として石石の一村を没あり小照へらる浪槍

此拾人乞ハ並の足將ニ非ハ人カハて不如云々を
一ツラシよとて願けらる黒田細川家より乞
カハ子石を以て拓きとも引ハ長己小鐵寄小及ふ
一 時廣高の恵誠蒙り今より取りて妻子をゆこう
育てハ福小むりて他家小系らん子非義小ハとて
取川せハ廣高世奉誠誠固て人字知を興人と
いとも池田利を貪らハて潔白の志を成す
象志々々体めて拾人ハ道に遠ハると思て之子石

五五
成興人とて池田長ハ本より福の多ハを落せハ只
君乃春遇の淡う々々る由て今賜ハ所の一村衣
一 食の用小足々歳月を送りハ毛政海外を求るハ
一 身上不足に成せハ餓死するとも始りハげてハ
石小意をへう々ハ尚家小系りてより何の寸功もハ
一 刻由怒言のきつかりハとも聊報ん時成ハ今
一 更互分の市加増中交々々使々々ハ若ハ長ハ武功
一 意々々と思百々々ハ市家乃一死平野源右衛門

八子石下さしこしととも長と同座小武彦雑談あり
中さひひく小由て長小ハ一万石下さしこしても程十分
なりとい中かこしこし手をはつけしハ長ハ仕
並多る男役小疵つき中ルる都てこのさるる病
くはとく固辭して終小受以

一 池田いりせの石乃戦ふり敵を下して引退来あり見
知多る者の田乃畔小腰うけく居多るるら池田を
見くそまを市通りハ池田後りまをを戻て退

き来たさしこし助て賜らんやと詞をかくる池田を
得多ると系馬小抱のせ馬の口を死く引退く家
に敵三人返りけ多り池田をく留て一人を突倒し
二人を追拂ふと後付慕ふものもかくそ本陣小
ゆり松者後思田甲斐守長政小仕ハぬ長政件のみを
ゆり大小感称せくる一日廣高と系會の時池田誠
心出くか板小演さ働をく多る人く市なると問る
に廣高拔群の戦功をも常小く引く。衛ふをを往る

さる者ゆへ取らぬよしくおそ詰り出さむと多れとく
悦ぶ事多小池田作小付て社入りと付助人や否やと
中込おそをせめてこい強候なる事うふと先懸る記
教ハ跡をく多い味方ハ續うハ捨殺したりととも知
ふ人ハ何ぞぞやぬ体おく打とんとハなれしとて
おそ殿と思ひ寄一裁よりあと小強り多る士何て
壯者を助多しハ二夜男ハ立られぬと思返し是
非かく助多中いと云長政孫と死飾りあき心中

或感せしる池田次の回(出るり多れハ人々何り何り
乃まゝなる返答うふと付の貴殿の公中誰り知る
人此れいさやとり小池田意若きとまより一ツの噂
のしかりそあおも表裏ある云々ある事一死との念
預多るふと付くは小うそを云はれ身に傷をり
ハ只今あ將乃御前あくがも歌中てハ心よ社る事
いといふ池田常に隣家小りも損り具是と二三日
の程とを杖箱小入く持せしり夜外を付ハ上より系

城下付瀨をこゝ系小のけて枕えよ庭取て出るふ及
てい系たごごさりりふさるるなりり凡平生の覚悟
皆在類の如し

一 瀧佐家の士班鳩平次と云者浪人して諸國を巡る序
に加後清心の將左林隼人の所小立考あり隼人因て
曰苗家よはるる魚しや平次り曰預入なり隼人曰
祿乃多かいらん平次いらん僕の俸米少く是たん
隼人平次の瀧佐家して二子石俵の身上こと少い今

乃河湊しうし思ひ漁る祿の分限を定めんと云平次
瀧佐家して功を積りたり多る祿を苗家小来りて
いささかの功もふれよ舊祿をわらひて之のうら合
とい瀧佐家して若くゆめらるとよれ先を足して石出
されれ後戦場の首尾を合せり一層をよ百石小定
めしめて下さるし一はきみ多り小共る小あはれなく文
系小あはれ返首ふるとハ勿論に教小入るしはと申せハ
面白き事なりとして預入任せたる朝鮮陣中小系

抽多る事七番有りて三子必石小免掃多り平次若き
人小對し武士の勦一ツ乃習あり此武功小よりて卷を
取富貴小ほあつんとをえりて之を原意を子孫小残さ
んとをえりる乃欲心あまひもく此多る勦ある者
必戰場小のそむ毎小死を死ありと思ひ定る身命
城よりいざざる時小自然小武功とあり利害あつて是合せ
安合する間小おこし小成りりも人小先を越らるるそ
といひき

一
乃乃名を中一子の乃小子ケつを極くをそしん
るも重り不中此或正月乃初めの日父子座をいめそ
そ方乃重り不中此ハ家相續あり事不相叶い就夫
今日限りとなて讓多るの念を入具是洞織自極意は是
战的よりて射は均と巻葉よ掛中此一子觀念の矢を以
活し不え來演さくせゆく別るふ之洞織を射破り中
そ付重下氣色變り松上ハ父子存命を量り自分的
立中此る家等を射貫は均とて巻より前よ立中此牌

迷惑仕合有らば、元毅自分も覚悟いふ事にて小
服美よ子を懸けし由(斗方を矢ひ弓活はるとも中
と放れ不中かえ是れにて、府より早け申す由
古人の淳徳末世の及不よあはしと申す由

一 大坂冬陣小池田越前守命を文と、尼崎の城を救ふ
寡して志りも大坂逃れ、清小依て松平武蔵守利隆
同左衛門督忠継と相共小計りて加をせり、利隆の宮城
筑後忠継の南新越後守り何とも武功の士とる由て

擇る者之各勇士三十人、鉄炮百挺と相違む、筑後小先
之と、尼崎にありて、南新越後守りともいせ、来り、二
日、て、後使を以て、今日、系、若の由を、筑後よ、云、き、す
候、と、申、途、よ、て、使、を、出、し、家、二、三、日、以、前、より、社、ま、来、る
旅、宿、多、水、とも、少、ハ、居、別、た、水、ハ、今、晩、迄、僕、ま、て、強、以、一、飯
城、を、む、む、魚、と、云、送、る、南、新、越、後、忠、継、情、少、う、ハ、水、意、小、流
少、と、返、答、を、筑、後、より、出、迎、打、つ、と、く、尼、崎、小、池、田
南、新、越、後、小、向、て、貴、殿、ハ、社、より、帰、ら、水、よ、家、ハ、先、旅、意、を

打巡りて中多跡より引へるといハ宮城ハ海ノ南郭
匠者セハ皆造りて陰持馬取寄者二人わて郭外小
系出ス己小日著よ及て南郭内來る宮城南郭よ何
我進よりつる中と問ふ南郭又といふも延くるれハ城の
構地の利萬委く思とると言ふ後後小南郭宮城小同
じくの子分初々の番人等いふると宮城う曰貴殿成
汝く未と令せハ南郭又同郭構の用心教乃考つて
道筋をハ思慮られたりや宮城う曰獨改かかるとて

151
未思ハ南郭のいづく己小急とてり片付も忽小をへて
以とて即筆取を以役付を定む某はくハ騎士何人足
程何人と後ハかかるとりハ遠淺して郭の恙ハ記不
ありハ既不定く後南郭教乃情ハ量りかかると教只今小
も考來るハハ小敗らるとりハ貴殿ハ小來りて二三日
ハ分あきハ意を清く評致せんとの來る夕とて
とも來を讓らん時ハあハ若く有有やといハ宮城
愧る事あり南郭云ふくむ色さるりけり町く乃目

代小来れとく呼ぶれ日代た人來り官城庭邊
后て来れといふれとも南歌子細のいとて庭の戸
成明とせ白砂小呼入あり日代た官城南歌を教せ
立ありを組て意等小何の市用いと云南歌然
毎日を瞑して曰苟も

源若の命を蒙りて官城南歌池田家の扱えりて
あふ来れとり身不肖ありとも
源若を守せ我輩を教せさらんや若一戦小及く

身方利を失り汝等盡く敵の爲小斬虜せし之貨
財ハ盗乃者とありん今我輩を侮ハ敵追もあゝ忽
汝等を斬断とるり我輩小ありとて日代等大
恐る皆膝を屈め首を低て額小汗す南歌曰象今
日の味活小見多不仕還の町ハをことく又外小あり
や日代曰是のみ南歌曰とて小番人を並て仕
還の旅人ありハ一飯の支度ありて一夜も宿せし
むる来れり番人の中一人是を見送りて上りあり

上口の番人小形と下りあるハ下口の番人小形と定候
此れより時を定くあつても遠来ある此番人のみを將
みとせさむ汝等一人必代々番利小居て相戒く下知
せよ若し怠池あるハ即汝等を戮して宥さすあり
歸りて令せよと目代等一々取りぬとて出るを其人
張使とて町奉行の利小對候の上ふく万中合へく
ぬて小夫へあつてこし小入來あつてやと云きし此の
町奉行中より來る南形一礼の後今まで町口の番もか

共小濡く後令を下をり本意なれ大連く小及の糸
皆時も早き來身分のなる此ハ中付く目代の將
怠あるハ即度小斬罪小受せん命令嚴るべき此の
軍小利あるき來市存の道出ていとハ町奉行をこと云
即誘引して番利小利を目代思へ此此を以小傍
より出多り南形曰汝怠より必一人ハ此所を去ざれ
休息の場あるハと笑く令して歸り夫より宮城と
相濺して日夜よこは夜共小自ら番利小受て怠るや

否と相うぐひて常成とす然とも時を定めぬ人番
初よりゆり舟場小瀬満より宮城より日世不教
取の恙へさう番を並くさうとて一と南歌より曰
昨日意よくこしを見り取の恙不よ阿は其少
深りれともは浅く若取を恙ハゆ路小泥人却る
味方の獲るゝんと宮城又曰向より大なる竹藪あり
焼拂く遠く見透さハ可なりと南歌系これ計る
故考来より大軍あり竹藪を特て兵を匿ぬき

理なり却る味方伏を並小便りり若大軍おて竹
藪をたのむ乃意ありハ是弱敵へ恐る小たは況
や其民の産あり一故ありて焼拂ふ身方小
仇もふ似たり宮城二来あり南歌より取るとは
して赤面を南歌又宮城と議して小至乃若小柵を付
ふ小宮城ハ小僕小令一南歌も自身是を見り南歌
宮城の柵を見り謂て曰貴敵の柵ハ弱して駒よハの
如く何ぞ自分見たりして小僕小令すや宮城南歌

の柵を思ふふ小屋より二三十間をりり出して付多り
柵隙小くは延を交是將小下知人の士を加へ番人を是
多りて体嚴怒侵をへりては南詔曰柵柵を恃て
あふうち教を防さ止んと小いありは第一用心小怠り
以ハ敵を威すり多き貴敵の柵内校し陰決炮乃ぬ
て是し自由ありしは利をくふ紀りと宮城帰て柵
残付かへり大坂の兵に誘ふよせんとてと備り
ふ束を便てやむ是南詔力に宮城も守る武士

ふれとも在付ハ南詔よ及さる奉遠し宮城後小人よ
語く南詔の如きは一當千者と謂へし實小國乃
重臣とむる小社也いふは表校しても及所小は
とて大小款稱し多り

一 吾居海右傍ハ忠臣の士たり字名今小傳へぬ其
ふも父の跡をあへりて時君より烈父の俗名を
稱しといとせりしは固禱して他の名を名のりぬ
何れ小傳をそと人の同くり小言て云父の功小及はと

いとも武運あつた父小増たる功も有すし其のふ
らひ去る付ハ何れとの功ありても後世ハ其を以て父
乃功よりなり人も計りかゝる若さの如くありハ親
かゝる功を奪ひんも惜まぬ名ありと云ある
一 茂久源右衛門として謙信流の之術を教ふる人あり別立
ゆして理義を深く好り一丈浪人として貧窮な
まゝり人々をみく尚付ハ名なきまむし若かり
し付上野の学政の方を居たり居たりハ其附の爲も

よりりかんといふ人ありて学政へ通るなり夜小源右衛門
ゆて相見ある此ハ僧正も怒ふまてかゝ何卒して大名
乃方へハ入中へ守夜小源分たるといふ事ありハ其
く近日系ありと約束して出たり其岩のありハ小
あふと思ふ板折出家沙門の徒ハ武士の蔭にて其
いひまゐる者今武士多り身とて付を治むること僧
徒を頼りて身を片付ん事ハ本意ありハ其如湯水及
ふとも筋ありといせありとと思案ありて並より返り

上野小幡僧正小逢く先小幡守へ参り市ヶ谷を蒙り
魚子釣味を中せしむる者多かる事の小幡世話小
幡守ありし由中へくと成りて中途より滞り参り
多るよりい述て再び訪さるしとを想して初る氣
名山より一生を終りたり

一 長篠の軍小甲斐の士一人せりて信長の前小幡
さま来る螺小幡純子乃下帯を志しり信長名を問そ
に英治の者多田久藏と名寄る信長を拍て汝い

伯父の葬礼乃時火車を斬り多るとゆり英治尾
張ハ我小幡しりみ有困之我小幡公せるとや思ふ語
り多る繩を切らせ惡源太もかゝめられたりり若
とる身の社ありとむせりしり長谷川後身所方
へ小川のけ繩をとけハ多田又さるる陰を奪たりり
小人突ゆる長谷川をふめて首を切り信長小幡し
るりしとといひ信長深く惜まれり

一 田中北城を攻りし時西御伊豫といふ割の者は短城

川具へて打て出るを破りたれい

東照宮進りある西々をう川へき者いと作有りあれ
とも言へず人ありて後後大膳の陣よ今
川よりて世来をいひ出たるふ後沼々小姓朝日
子後後丹後十八歳ありてをみ出討死すとい
りふ後沼々々女麻衣をいひやといひて小必定討死中
さんとしひさいりりの古兵も軍志の福つる西々たり
たやとて討人子思もよひて立されと罵りたれい

かこよりいやとよ子めつたやい並々あり
末頼母々々若者なりといひありああり子めあり
城跡をよ西々々首提寄系々ん抱をと獨々々て退
きんりかくて夜涼て後沼々々せし後炮をとる出
曉陣をををる小出是旅と後枝の間ある竹林小かく
是后たり夜あけり西々馬小宗是將を川具へて
来る

東照宮ハ是旅のくくの小小陣にておはせりて又

おありと仰有る事小ふ外銃炮をたぬき西々を
馬より打落し走り出く首をとりかけ帰りてかく
と申し

東照宮あり此剽乃者よと云れさせぬハ是よりふ
かろ名言くせり

一 田中之部大捕石田之成を捜出し回給して大津迄
由旅致へ進す

神君沖感収ありく治部少を子川校席小押入し小士

をして是を守りしむと後小井伊直政小命有る
餐食作付くる直政之成を命じて御平日の礼法小
たるしは皆参て守り居る久し居るを召て作小曰
石田を汝父の仇と此之誅せしと云る居給して
家方小之成を一疾留り町寧にりてか明日日之
上して曰愚父之忠命を伏見城小捨る事ハ忠を思
ふ小依てなり何そ父の故と云るありんや公命乃
病を以叩祈留り願ふこととて之成を返ししるる

神君中分祚妙なりとて市称者あり之威をハ別人
に領けらるとなり。

一 森守政右衛門忠勝ハ伊勢の赤坂郡萩の城を築き居り
秀勝の子にてまこと多し者あり政右衛門十八歳
なりとて池田信輝より命を乞ふ時稲葉伊豫守一鉄
のむとより信輝の陶とて焼利を授けたり政右衛門
見よ是ハ質物之阿るな物をたゞて豫州とて
笑ひし一悪き奴りよ夫をゆへあそれ伊豫守目乃

前して打碎きたるハ快くゆへとり信輝汝の河を
礼なり豫州の目の前より碎くへくきだして見よ
との河をせより産をえくを懐小入伊豫守の
方よりきりかゝる事とては対面せしむ小
政右衛門焼利を取出し信輝より焼く相小ハハ質
相るハ返し中ねといひもあへん相小何ぞ打碎ま
と走り出れハ一鉄をめよと知せしむ小ハ
のびく歸りあり信輝ハ政右衛門うつたす一

浮城ありしとて打碎く一は危き事とて門戸小侍
きし知小侍り来りてさうせし事ありしに
とくろりのかけ多し口を死せし思せ申て後や
凡君とあり身ハ一云も漢ありしに先ふ申せし
詞を云れぬれとも碎くつくたくたいて思よと
あひをかけられ若き男の骨を刻する事とも
さすや道はゆるくゆるくハ幸あり已後を漢み
と云ありと共

一 伴玄礼ハ池田輝政の親長ありしハ輝政世を去
りし時必殉死すといふ事人といひけり武義
利隆ゆれよく心を付よと侍所は命せしめ納
棺の日と次の間ありし物をもをひききそれ入
り又因りてをあらみけり思はぬ衣をそや腰
突きたりを抱おし人多く走りておし首をかくと
あは利隆をりて出せし玄礼いふと申させしハ
玄礼取り御恩深く蒙りしハ由供仕りるん志あり

小思つけらるるハはをくくハはゆるさぬをりて快く死
出の道小執事申へといひぬれハ利濟さもあること
来たりされとも高士のまハ成りてを思はせて
先代の供志をらんハ人と思ふ極も玄札ハ先代の志を
も知り氣志小登る身のように今乃世継ハあり
果するハ供して死したるふんといはんハ今までの
士一人も我ハ心腹する者あり一高ハ獨支と成たんと
目前なり高を獨支とてあつてそれを忠とも義とも

思ひぬハとく死して由供申へ一演て我ハ一留むハ
三や高ハ汝ハ死するふりて士のまハ成りて
只とく北極よと申され高ハ玄札涙を流しぬよ
ぬ作を取り高ハ進退究りハと申高ハ利濟とく死
して高を獨支にして先代への存公とせよと再ニ申さ
しハは玄札とくいそを指く高ハ作し高ハ取
ハぬ士はとの者ハ刃を腹ハ突たてぬとて止むぬ
そふハハ高とも只今の御詞ふりて社を志のひて人高

ろ指をさくしひともあつて(孫左衛門)と申されはさてハ
赤之士の主よある事を切なり汝ら忠義比類ある人
うけよくいひんりてと申され月小入つてんりて

一 大木七依恒持 加茂清正の士大將之清正乃北の方大
坂小左一を石田人質小と云をゆりてハ七依
清正より付らせし竹内若き清家正と謀を合せ惣清
正小居る清正の叔を以て梶原助之清小の梶子の赤計
を成せに依祿うけひ唐川義へ大病人のとくくしを

かごふのせ綿帽子かあせ若後小公家と云祿内番の若
よて戸をひらきあけし御家小やと云初め小及り後
ハ見別く又小智めハ又川ハ小蟬虫取を喚ごと小あき
くつへをさせたり是も番取思ふとて後ハい月とハあき
おそきおといひえおやうおこりぬうる知小清正より
廿八石田小蟬虫と云やうなうといふもして水の方を敵
小と云きひして落せよりと云来りこれハ大木たぐみ
つる事あてハあつた小の方小由を告ぐ梶原の會の

トよ山の方をおりかくしそよふもこれかゝりて毎の
とくかこの戸をひらきまら番の前を通りまらり大依も
跡より供して着度おめしむかおの方を刺殺し切
死にましと思ひたきとも来ななれハ特後ハ小
領で懸然お糸こざり番の前をつとりまら
二二町おもたりれはいりおとまきひりめく同小
飛うと一里ありもこざりのひぬ番取ともたは
多るよとて礎をあげ逃れんとせし間小必こぞ遂小

肥後小トりおぬ大味竹田ハ大坂小居残りて世り
浅字へ打し来りハ思ふほど戦んと然し小園ケ
系乃軍破りしハ思ハる小を適れり大味を
佐々成政小はへ後清正小はハ才略等実業備し
のあれハ清正氣を厚りしハ今宵の来小りて
又我子石の祿を増あしりれしとせ

一 秋戸第のハ池田輝政の長く関ヶ原の軍敗しり
長秋大苑大埔正家江州水々の城小りしを輝

改第のを候りて陸系を勅めらる船戸是ハ物をも
多る人物多しと辨し中事此とも故とく行向しよと
作られしハ船戸方ニ付斗のふき浪の板を造り
せぬところふ入せし水は必長船小を陸系あらは
士卒も別の事ありし世命より中せとありといふ
長船河津津乃城攻りて関ヶ原よさせし軍もせて
惜くしきしハ世城を枕せんとふれ者ともある所
船小陸系せんハ社辱おてれといハ船戸長船の

七五
への士を呼て遠より浪の板を出し焼てむりしハ
門射り詞分かく中事船りふき浪又浪火を丸り
見せしとんとて思ひ切たる体もいれりあり
りしハ長船感して多したをさうとていふあるん
も力なりし故りたるさたきひふきふりし陸系せん
すたあしハ是ハ見苦しき物也しとすあしと
貞宗の服指をあししり船戸尚座をさしし
長船小姓を呼て破れ出し陸系を中書て船戸

に誓つては取戸帰らぬ長束城を出ぬの誓ひを
入らむと云り。

一 小岩岩、助の夜堂家の士あり、子孫を所、床之所
とて勇士、けり、大坂軍、小見、たふらう、向ふ、岩、助
を、先、許、ゆ、く、伊、賀、の上、姓、小、けり、或、日、孫、を、所、組、打、し
敵、の、首、小、あ、く、と、淡、炮、小、中、く、死、く、あ、り、し、親、の、之、く
ゆ、へ、し、お、良、父、小、碁、を、打、居、た、り、し、母、は、く、く、あ、を、中
来、り、し、と、つ、つ、つ、く、板、小、父、小、治、を、小、岩、く、助、守、て、石、住、谷

是非あまきと申り云て碁をかこみたり相方の人先
碁をやめたまへといひ、小岩、く、あ、は、た、と、ひ、止、め、た、り、し、
之、り、と、せ、す、し、母、孫、之、所、ハ、何、と、成、つ、し、ん、と、口、説、あ、れ、と
床、之、所、ハ、一、日、討、死、し、た、り、し、今、朝、城、出、て、守、持、り、し
といひ、し、ら、小、母、さ、く、る、小、情、あ、き、来、り、し、人、は、と、あ、の、か、さ
ま、小、治、れ、ハ、岩、く、助、い、ふ、女、る、と、ハ、と、て、士、の、家、小、生、と、て
く、く、く、ら、さ、り、し、小、魚、さ、く、は、戦、場、の、討、死、ハ、定、り、た、る、事、と
活、て、く、る、ハ、然、は、合、向、り、若、死、と、し、場、少、て、逃、て、わ、く、ハ

歎く「予本んとてかゝもさうく親もかゝり〜」
其一丈小遣十七あるを名やぶり〜勇者にてさふらふ
となり

一 三浦次郎右衛門を蛸瀬賀の家乃士あり養子として
乃後実子を没げ己ふ年も長せし小養子其歳を所ら
い〜実子の孫助あり討の業を養子〜ふらふ勿
論あり今己よ成人せし上は彼を惣領小たてん奉
ふそ本意あり其子ハ訓ありと譲ていひあれハ

次郎右衛門やうそ一族残りの集め〜自々を実子養子
の隔あり〜小其歳を所かく〜奉文小公治り
〜孫助小愛をゆ〜もれ〜奉外小其〜侍るふそハ
お〜さうし士あり〜者一多む親子の契約あり外
公をうけい〜さうい〜や〜振筆金く存意小阿
ら〜る愛かく〜小其歳を所い〜み中さん小ハ八幡
も照管あり孫助を勸尚〜と云す〜〜
ハ世上一と〜〜中〜〜死小あり〜と其歳を所領学

〜親屬皆く收ひ感せしとなり！

一加賀中納言利常の士不破彦三曰ふ石の縁をうけ
寄武名を知りてたりと事も同く〜彦三といふ世質
愚鈍小見へく常小急りくちある事多し是を凍
むる人育く時をといふ者といふ收ひ入かといひふ
う〜用る者〜も思へされ又いさめたりと耐不
破あき節ひ才是あり由身入百石家愚れとも
石さの〜家流られひをといひもを交〜て人の

勝劣る縁の多少ふ〜をや何とてさほと理の不通
あるそといふ不破それの事も知りぬ今の詞ハ戯之亡父
常小急を減めくかざり〜と利根多てある事ゆめく
ま〜〜人の心ふ〜んとてかりそめおも被ふ事之
急〜〜に唯ちり〜き義の一筋あり汝武勇の身
なり士の義を忘れさしと申おきあり〜小遠とんを
日夜是を勤る外他事あり衣食の次をぬまは従者
と艱難を同くせり日本身一の〜家あり加州の士中

家と祿因りて者多し〜思ふ事よと人馬の屯く
やある武具乃指ひ懸ひたる家小勝る者有と見え
名氏又利ふる有りり多る事やおしたる使ひ多る事
やい徳をやり多る事やい平生日く身よ者〜そら器
乃家小生〜穢をゆるつせ小せは古身ハ亡父と親
〜き人あり〜なかく誅めおる事も亦く恨ひ
あり〜されたる〜道小教へる事〜小只時を足
〜世小従へとや実の事言小非〜〜言よ

従ひ〜て本言小従りんハ如何い〜んと言ふハ誅
免〜人小公服〜た〜あり

一 系極丹後与高國收斂を好きて領内の百姓苛虐
に苦むと懸〜寝下の傍小舎あり〜柳小令浪
城〜川〜積め〜祿是を身〜熱とす〜上父
言廣入道小不孝〜て小讎敵の如〜
嚴有院様高國の領地丹後の宮俣七万石を石上
ら〜と〜南於小配せ〜る〜と〜大膳亮幸利小

命せしめて宮津の城を父死にむ幸利宮津の
て上意の執を高田の家臣小通せしむる如く何
あんと會儀す或は武士の習ふれは主人の下知なき
小治てハ後まゝとていふ者あり或は筑城して
討死する事ハ安んじともみ多し小之礼を死をハ
叛逆に似多しといふ者あり評義區くあして父
世ハ澤圖書ハ世ハ乃家元たりと不存を述りハ
を一府皆をと同して幸利の旗幟小使者を以て

當城を明渡しし上意の旨漢く承りハ父ハ
一ツの誤泊由庭ハ子細ハ人の子を付あくて城を渡
しハハヤリハ昔より今小之く武家の定法誰も存
多し小由庭ハ上意此守小従て畏り存りハり
婦女小ひとりさ幸小ハ再ハ士の義之かゝる路
頭小鐵死仕ルても枯骨の上まで天下の人ハ小津清
せしと父祖の名を汚し子孫小社を張りハ幸是
非に及ん存ハ世ハ由賢者小ハ有るべき義小由庭

此れとも日本の國々争奪を悉く言命のまゝ小
しむるが如くも存背者由府あるが如く況や信信に
乃身とて片之の由とりを中して公礼を義
免せしむる今由静謐のとき義城を待り天下小對
しをりて矢石を放ち干戈城勅しり死しても
猶必罪ある事小由府ある城ハ速に治しをりて
義勿論に由府此れとも右中家武家の定法を捨れ
事存生の由小待りかゝる如く丹後守家を穢中

付垂る者二人切腹仕ゆべし檢使を三つ此由府
られし死後小由府免れ極小存ぬは天下小對し存り
るを以ての罪ある主人の爲小忠義を全し身小
取てハ武名を失不中此極ニツの者何れ一六事小由
ゆへ願守の通中し此家小の死後小家中の諸士異
義小及むる制戒守く堅く中付遠變るべき極小中
付おさるる由公号にかけらる事毛改由府あるが如
此の條多しと申せとも此義宜頼み存る可小由と

云幸利より不道理分明あり由り早道の使者を
以て委細を以て府小伺り小上段に達し感し作
られて高田に詣り墨付を取りむ書書未見を見
毎幸利小一札を速城を詣り他流正しして諸事審
にせり幸利も家元らうくそ有る智と勇と
忠とを兼る者とりよへて大い小歎羨せしれ
る家

一 京控丹後守身上流る家元の漢書書を以て浦肥守

少く由緒も何れも少く抱へて日月見の付肥前守
以りたるはさき方幸南家少く知意有る小依り
千石あり呼出すなり家元とも同席たるはと云
りりれハ熱礼して退き次の間あり家元共小對し
高野小云あるは由南家少く知意ありふり千石
にり石出さるり私儀不仕合ひて浪人もて朽果ハ
全是非の主取致す初めハ何方へ来りても千石取
兼りり知意ある小上段に千石ありと云り知意

かくハ取まがさめや不意ハ不意ハ及極の義なりハ
則今日市帳下さる下と申るるを之分を肥前守也
にせられ果書哉哉一兵分と方云分を云極なり
家ホウいひハ一通りの新系者おていふと云人
めわり之禁の供りこと申されり付果書候
由察意の氣極有存なりとて礼を致し永く勤け
るとあり肥前守果書をせり小遠ぬ意量者あり
と稱名ありといへり

一 系極丹後守高國又安和軒の詔にて領地宮津城を正
上られる丹後守に代ふり配流せしむるは苗守
るる落合を私分せりるの城を預り居る身也

公命おれいとて容易小治してはる君への申分立以
丹後守より海へと一通來りか吳義おもふ
申すたもあてハ一さへ支へ後城を枕りて自殺
をいふより一因の士連判を以て約束して自由使者哉
以て江戸へ申紙ある上使書公大膳元堂よりとて

赤坂の弘めて逢し夜小まより申送りの大膳元大に怒り
公命をひて右とらふ何の遠背り
と手遣付到着して其裁み及びゆゑに送し
味因公の族中不仁に及べしと送し
前して送れ出さしと有し時使者中ハ扉筆ありて
申し旨執を書述送し右中より付らむと給り
とりふ大板の紙叶ひくく唯目初めて送れと責
られとてハさしとて書りるふ形のとて紙書成りたり

送れ終りて判を右と有しハ判を書きよめ
たるやうふして打消く懐小入おえの如く送れ
りて後丹後守の一通に送しと奉りたる城を
しるるに後彼の士の汗へ大膳元より使者を
前知ハ知れとも一倍の祿を無く色々奉り
と有しハ作前くハ但前日の由氣色骨髄小徹
強くハたり送れをよとく送るとも奉り
いと苦へりるとそ

一 三河殿小右田久左衛門と申者後小所理といふ三河
殿の越前の国津領のとき城地小右殿（まゝ）を其
早より久左衛門も新系者なれとも供よ其出久左衛門
を其毎よ武道の嗜み深き者なれはる繩を掛（枝）に
入し持系と越前府中ぬく城の繩渡ありし小
免の角のとして送く者し付久左衛門は小右として用よ之
之後久左衛門を石出されし作（ま）はる月々（ま）奇（ま）
深き者と申奇物小る繩持系はりたるとして慶長（ま）の

由あり又或る付古市と馬といふ士竹の先小る繩（ま）
結ひ付持せ供よ其左大膳（ま）を其られはて付の外（ま）
公者（ま）あり免角人ハ其付少る事ハい例を用之
中（ま）ものなり

一 紀伊國南新院後市代大和郡公を本多利元記元記中
此付月記より和歌心ハ大京熱右衛門と申者を使ふ此
越山熱右衛門事一之坂の殿り本多平八（ま）此越山殿
熱右衛門働の中（ま）あり（ま）付平八（ま）附属あり

實ハ 徳川家の士の中右使者小笠原忠元使南院
後由少りて軒を法成市置るとは下とてして法作ハ
之方より元末世方家来りてハ月記を之退りて紀伊國
ハ新羅ハ市丸之て法成市置るとは下とてして法作ハ
中上ハ私奉中替代より然ハ仕りて一版を七分中板
小仕ハ左あの家にて朽果中を治小相控りハ私子終ハ
他國ハ使中付ハ奉も之ハ私今度御國ハ私を之越
ハ奉 邪心と迫ハ市府ハ左檢者御國の案内道箱

をも見せ置り色くハ私越ハと存ハ左別く大切
乃使と存ハ市法中上ハハ私後市機極悪安ハ使
めて去とてハ慥成者と存ハ市代るとハ板の使者ハ
有ハる安ハ

一 甲賀孫々傍奉是ハ稲葉丹後守家来りてハ丹後守ハ
稲葉法清守子ありてハ法清守ハ春日の月の夫ハ春
日の月法石出ハ右丹後守ハ若法守親父ありて市府ハ
丹後守弟一人有ハ式部と中ハ原ハ不ハ法ハ有ハ

丹後守と散く不和の故孫を遣ふ討く糸の極
市中付の孫を遣ふに乞ふ所候事申して有るに
とも市連枝候の市候より何卒市料爰迄托し極
再三申入るに而も極より申すに役小之申る爰に
底小ては急角成る爰に申人小て申付合申す
此時孫を遣十六歳未希爰有るに定て若年あ
力量有るに申丹後守も市中付の申すに申す
孫を遣申すに申候事申すに申候事申すに申す

此作付申すに申すに申すに申すに申すに申す
付に申すに申すに申すに申すに申すに申す
万一勝負ハ志れぬものふに私奉式申候事申す
り相果申すに申すに申すに申すに申すに申す
候候候を此作付申すに申すに申すに申すに申す
付に申すに申すに申すに申すに申すに申す
に申すに申すに申すに申すに申すに申す
申すに申すに申すに申すに申すに申す

通し申されし令務の大服指振らうけて是(系り)と
市中近寄かり打捨て申由申し付大切の由意小く
由座の危急角通るりて心申上申中しく服差を扱二三
間も扱して丸腰小形成中しく考申し於は合丸式形も
かゝり申中り小形成りせし孫を侍を付さ由石以快の
来う極く小由言ふて心檢上ハ分小形差並うく移へ
此作付系りりて存付し極小との由言小由座の申もて
て心死うりり力量有し丸式形をく付懐申う丸守

入分を扱胸之(丸)高波檢使を願ひて於辨慥小形にて
て市中上の腰ハわけ不申る丸極小公約也と申りて式形
を以て是近小由座の也申之退り成り(賤)供て仕合申
りてまじり式形と逐電致し檢使も同申りて丸や急
に申之退り極小申りてのうせ申中申し後多年を
之りて式形痛死して心申分丹後守り孫を侍ハ
使者を差して式形も痛死申中り(ハ)最前足座申
者も申し丸居席宅也と云返り申され申定て今の

丹後者小室子孫一者一在存ハ始終身事成仕形小
 由度ハ日本ハ流石武因少て市度ハ少極成勇者ハ異國
 小も未業ハ

一 酒井空印の家士小室野文左衛門といふ者ハ
 丹後田舎の城々系極家小仕ハハ小彼家継子あつて
 祿減せしきハ時浪人となり空市少及之祿少石六十石
 にくは石抱ハ文左衛門武勇の者少て大坂ある所の陣
 小も系極家少て相意の働あり空市少も少古戦乃

事おと為禱うれり宛初酒井家小抱ハ時后所を玉
 り引移りの日小ハ足燈をきハ何と用意おとい多
 せハ夕方と成て綿服に帯刀せハもの遣をわけけ
 ころ片少少て馬をひき門前よ立ハ系極ハ屋敷少や
 と向ハ足燈言て是ハ少方ハ文左衛門夜の家来ある事
 云ハ彼士高ハ別文な情ハ少ハ驚馬少案内少て入て
 洗足湯杯盛ハハ少家少是少ハ少ハ少先馬の足を
 洗ハ少飯をまハ少と少ハと少ハと少ハと少ハと少ハと少ハと

いそ後安座して腰小付^たる各商を出し食むる小志
をく育て小者^を人具足と箱を肩小をて来るその
箱ハ衣類を入しと見ゆこと麻上^の下の外小ハ一物もな
うりしとそ減小戦國の状況を中合へり

一 越前松平を初少補代ふりて國の東南ふりたる心の
白ふり今冬へつとさたる二里をりり小二十里初者
決へつと心あり木立志^をとみをりりか^らた心
を^する^かあ^らせ^て成^るふんとをむ者あり國を日

小者へ有り徳来とも既小洋さるるさるりしと解世に
刑歌左邊つとりを初物^を魚^をつと心とみそのを問
へ小城下初橋川の水源^をとみと常小をとけて
さ水きたる初ハ初初橋川おいたるさ水出るさては
そ初橋^をて後^をとそ^を心^の大^をさ^らるといとも
彼^の下^の岩^のを^さま^らぬ^りつと^は春^小成^とともま
つ指^のを^とけて後^小漸^解とそ^をれたるさ水かくの如
し若し彼^の心^の木^をさ^らぬ^りつと^は春^小成^とともま

一時小解て来んふい城下其家去りて水の中より
く人民魚と多し。其のなまらひきりて水入つて
田畑損亡年いくらとりみ汁りある。又水は漸
くふとけしこそ夏も水ありてそれを取らば用
水ともして里おも損亡あり。彼を一時ふさむる夜な
らハ春ハ大水夏ハ濁水。水旱ゆり川の損亡一二年
成出ひして水百ある損却ふ多し。さもさつとさとい
ひ。夜よその来止とぬとあり

一 井汲掃部政月本侯法左衛門いひくハ武士ハ人の恩
顧の輝余ふらうとま夜くのかせきをさるものこ家
等ハ水百石りされたはハ是相懸の勸をいさへへ
厚く市恩を蒙り。くハ家より先を致されよと
く物さのめて去先ふをむ流布し通り法左衛門ふいた
して恩顧厚き加恩立身の輩ハ義理おも法左衛門を
きし除て近出れハ又法左衛門右の如くきて彼者とむり
先ハ近出るハ又外の者も法左衛門より先へくと出れハ

又右、通りて系より、是く出られ、系より、系身お癒
の勅を致さるとして、返出さる、小依り、いつとて、も、掃部政次、の
去先、小成て、教を、実為、したると、え、法、た、坊、つ、う、勇、功、とい、ひ
業、とい、ひ、諸、人、是、を、感、ず、ぬ、後、八、千、石、中、で、賜、り、り、家
充、職、を、勤、む、分、の、子、孫、三、千、石、を、り、

一 東福門院御入月 御上洛、時箱根、小、て、稻葉、美、徳、の
内、相、角、之、美、とい、ひ、者、道、掃、除、の、を、り、小、出、たり、この、角
之、美、ハ、大、坂、陣、の、も、武、功、あり、て、皆、人、の、知、る、ま、の、こ、に、御、市、目

付石谷將監、角、之、美、小、向、て、世、後、 娘、若、柳、御、上、洛、小、箱、根
洛、小、巖、石、を、も、切、岡、さ、足、場、も、よ、く、御、薬、も、由、れ、さ、る、板、有
魚、子、和、小、一、句、さ、も、あ、く、相、遠、る、る、義、是、ハ、角、之、ち、と、ふ、志
あ、る、り、あ、て、ひ、と、兼、く、よ、く、知、り、る、角、之、美、友、よ、遠、意、な、く
中、さ、れ、々、れ、ハ、角、之、美、后、文、字、よ、伸、上、り、六、ハ、作、と、も、受、存
り、に、世、箱、根、ハ、関、東、第、一、の、固、め、若、洛、の、り、て、相、守、り、ひ、る
湊、祖、の、上、小、也、湊、祖、小、こ、を、は、な、れ、と、端、る、和、あ、く、中、々、也、ハ
流、石、の、お、盛、も、角、之、美、入、り、若、洛、の、後、ハ、重、宝、の、市、人、持、あ、て

小とそ答れありとあり

一 義公市足姫小入以成谷と思食以者者一是將大將とも
へ市通習を以て伴の部市月言以伴是以如皆能初り
市交中上るこま中少伊後を大橋つ堅く九板よハ成不
中以表向めて志者以伴付りて有畏以市月記出で以
伴付り成不中以中少付彼由使甚不使小存一在
帰り市足將大將とも皆市記中上りてを大橋つの上
具小之上伴り拙者共そ殿く共 上言と中少伴乃返

言ハ仕る安成と存以中上出ハ義公汝り存意不了言
ありを大橋つ中交を以極せりこ職かくのち中り
に以ハ九板小あここ事こととて市表成ありあり

一 若湯小派をハ水射和氣の家士あり一或とて和氣者
衣服若磐の衣を中と進とて帯めて小派をう教を打
出されハ小派を次へ三て誓切拂先代より存公致りハれ
とも侍の教をうこれ事々一武士の一分捨ハ執書並
して之退るる由一泉州小ハ後悔あり事ハ先所を指て

小浜を以て清を以て居るを以て金く自分の誤ありと
象州中さ水はさし小浜水時之節右橋門苦あるハ水元の
由候ふのりる若の誤と申してハ改く帰る魚さ小浜を
にあつひる命小宵さ不届小ゆる切腹をもて江作舟
ゆる之海より板中歸りて申て申て申て申て申て申て
州中海者も心居されし小果して之よりある加増
申付納戸頭小波されくると象州英雄といふあり候
く昇進の上と氣力を助く是右之節右橋門と小浜を

来表左橋門の申今も之跡目ハ大迫お監家小者りし
あり

一 観瀾^{九十一}宅の初て江作へ来り知る人もありしは
日本橋の急の裏店小宿を求めて後居せる時しも
十二月の晦日小夜隣の家より商人の来り候し是れ
命を返されよとてさゆく小をさくき水ハさる困窮
して償いさやしもあし争て止まらるを確たあし
付付く由小由さしては先刻様家小ういり来る

後人小ゆる先りの争端をゆ小堪りくはれ道小
くつゝい残し多る令少く斗りあり是をくり中
ゆるゆる償われしとて流しあれハ主客とも小驚
きて是を感しくちまひ世末を傳へて世小名を
知うれく人小知れん料小とてかくあせるおもあ
らむとも不忍の人ふて初のとくをくすく世又名
残りくありとくや



治平金訓卷三十六 大屋

成平金匱卷之三十一

BOOK 31

三十一

